
白鷺

なつく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白鷺

【ZPDFード】

Z0866D

【作者名】

なつぐ

【あらすじ】

高校二年の夏休み、主人公は祖父母の田舎で過ごした時に体験した小さなお話をします。

高校一年の夏休みは母方の田舎にいた。そこには田圃と山と、パラパラと散らばっている人家しか存在していない。私が住んでいる場所はコンクリートとアスファルトで固められた街だったから、田舎の景色總てがもの珍しく、大歓迎だった。

周囲には本当に自然しかなく、5時くらいにはもう空全体が明るくなるので、とても健康的に目が覚めてしまう。祖父母は野良に行き、私はテレビでやつてるアニメを見ながら午前中は勉強した。昼過ぎになると、彼らは帰つてくる。一緒にご飯を食べて、それからは私が出かける。祖父の原付を借りて好きな所まで飛ばす。もちろん無免。今日は少し遠出をして、蓮が咲き誇つているあの沼まで行こう。

沼は山の中にあり、夏でもひんやりと涼しい。沼の周囲には高い木々が生い茂つているので、正午くらいしかしつかりとした日の光はあたらない。だから、午後にこの場所へやつてくると木々から漏れた光がオーロラのように透き通つて見え、一層私を喜ばせる。

ここでは何もする必要がなかつた。本当は絵を描きたかったけど、道具を持つてこなかつたし、私には絵画の才能はない。力強い蓮の葉から見え隠れしながら咲いている花は纖細で、気高い。そして自由に見える。多分インドかその辺の話だったと思うが、花の美しさに魅せられて、それを手折るうとした者は沼の精靈によつて水中に引きずり込まれたという。

そんなことを考えているうちに、あまりに涼しく気持ちが良いのでウトウトと眠つてしまつた。

誰かが見ているような気がして、目を開けると、本当に女人人が私を覗き込んでいた。

「うわっ」

驚いてはね起きたから、その女人に思いつきり頭をぶつけるかと思つたけれど、その人は、するりとかわした。

「起こさなけりや 良かつたわ」

彼女はそう言つて、私から離れた。起き上がると、また驚いた。彼女は油絵を描いていた。私の頭の中にある蓮のイメージそつくりに。

「上手ですねえ」

素直に感想を言つと、彼女は嬉しそうに笑つた。

「おだててもダメよ」

「お世辞なんて言ひません。それを知つてゐるから、そんなに嬉しそうに笑つてるんでしょう? ところで、お姉さん、お名前なんて言ひますか?」

「砂由」

彼女は地面に自分の名前を書いてみせた。さより、と読むのだそうだ。苗字は教えてくれなかつた。私の名前も訊いてはくれなかつた。

帰ろうとしたとき、夕立が降つてきた。

「私の家に寄る?」

そう砂由さんは言つてくれたので、原付をその場に置いて、砂由さんの車に乗せてもらつた。

彼女の家は山からそれほど離れてはいなかつた。背後には森があり、向かいには田圃が見える。人家は見当たらない。そこでも驚いた。だつて、物置きみたいな小屋に住んでいたから。

「ぼろい小屋でしょ? でも、気に入つてゐる。さあ、入つて。中は割合にキレイよ」

雨はますます酷くなつてきたので私と砂由さんは急いで家の中に避難した。

「あ、中は普通の家だ」

「ほんとに失礼な子ねえ」

砂由さんは、そう言いながらも別に怒ってはいないようで、タオルを持ってくれた。部屋は、きちんと改装されている。一人で住むにはわりと広くて、居心地は良さそう。

雨が止むのを待つて、原付を取つて家に帰るともう日は沈む頃だつた。祖母が心配して玄関先でウロウロしている。私の姿を見つけると少し怒った顔で小走りにやってきた。

「どこ行つてた。心配したのに」

「ごめん。雨が降つて來たから。ほら、山に行く途中に小屋みたいな家あるでしょ？ その女の人に雨宿りさせてもらつた」

そう言うと祖母は、よけい仰天した。

「あんた、大丈夫じゃつたか？」

「え……なんで」

祖母は、砂由さんがこの春にここに引っ越してきたこと、もう少し、マシな家が空いているのに無理矢理あの小屋の持ち主に頼んで住み着いてしまつたこと、あつという間に業者なんかを呼んで、位置にも使えない状態だった小屋を改装してしまつたことなどを一息で話した。

「なんか、仕事もしてないみたいだし。あんまり近寄りなさんな。頭のおかしい人かも知らんし」

次の日からも、私はほとんど砂由さんと一緒にいた。砂由さんは私にとつて警戒すべき人物ではない。もちろん祖父母には内緒だ。祖母が言つたとおり、砂由さんは働いていなかつた。ここに来る前に辞めたそうだ。

「画家にはならないんですね？」

「私くらいじゃ、とても無理よ。それに油絵は趣味だもの」

その日も、小屋の裏にある森の小川で私たちは足を浸けていた。セミの声がやかましいけど、街にいるときのような暑苦しさは感じ

ない。いつものよつやかな穏やかな午後だ。

「砂由」

聞き覚えのない声がしてその方角を見ると、背の高い痩せた男が突っ立っている。

「どうしていきなり、いなくなってしまったんだ。仕事も辞めて。

……探したよ」

私なんか無視している。そして懇願するよつに、砂由さんの顔だけを見つめている。

「もう、あなたのことなんて、忘れたわ」

「妻とは別れたんだ」

「同じことよ。愛想が尽きたの」

「……また、来るから」

たった、これだけの会話で、男は引き下がった。エンジンの音が聞こえて振り向くと、紺色のシビックが発進するといひだ。キチンと磨かれた車体が水面のようにゆらりと光る。

「不倫つてやつですか？」

「そうなの。つい、魔がさしあやつて」

私たちは、それきり黙った。セミの声がゆっくりと耳に滑り込んでくる。私はやかましいセミの啼き声も聞こえないほど、彼らの話に集中していたのだった。

それからも、私は何事もなかつたかのように砂由さんのところに遊びにいった。男は、それからまた現れたのか、知らない。私がいるときには姿を見せなかつた。

八月も終わりに近づいた早朝、寒くて目を覚ました。窓を開けると、空一面の朝焼けだ。急いで着替えて外に出た。雲までが薔薇色に染まつている。風は冷たいくらいで、もうすぐ黄金になる稻穂の海をざわざわと揺らした。空を見ながら歩きだす。夏の終わりの朝焼けは冬の夕焼けより、どこか哀しく切ないものがある。

知らず知らずに、山に向かって歩いていたらしい。前方を見ると、

夢かと思った。砂由さんが私に向かって手を振っているのだ。

近づくと、砂由さんの右手は田圃の向こうを指さした。絵筆を持つている。そして、左手の人差指は唇に垂直に添えられている。

砂由さんの指した方角……田圃の向こうに白い鳥が一羽いるのが見えた。

「白鷺」

砂由さんはポツリと教えてくれた。同時に鳥はフワリと舞い上がり、飛び去ってしまった。

「あーあ、逃げちゃった」

「白鷺つて、夏の鳥でしたよね。確かに季語では、多分そうだったはずだ。

「いいえ、違うわ。白鷺は冬の鳥なの

「え……そうでしたっけ」

知ったかぶりして間違えてしまった。恥ずかしい。

「それにね、白鷺は、ただの鳥じゃないのよ。あなただけに教えてあげる」

そうして、誰も聞いてる人などいないのに砂由さんは私の耳に口を寄せて、白鷺の秘密を教えてくれた。それは、妄想……と言つては悪いだろうが、そう思わないわけにはいかない。

「綺麗な……伝説ですね」

そう言つと、砂由さんはうつとりと微笑した。

「伝説じゃないわ。でも、あなたならそう言つと思つた。思つたら、言つたのよ」

砂由さんの前に置かれた画布は、真っ白なままだった。もう一度、鳥が飛び去った方角に目をやる。その瞬間、朝日が顔を見せ、稻穂に乗つていた朝露たちが一斉にキラキラと輝き出した。

それから、二、三日して私は祖父母と砂由さんに別れを告げた。

砂由さんに自分の住所を教えたけれど、手紙をくれるだろうか。

普段の日常生活に戻り、日々の忙しさに田舎の景色を頭の片隅に押しやる「」としたころ、大きな小包が送られてきた。そこには、あの朝焼けの空と稻穂、そして白鷺が一羽、描かれていた。

「この絵を送ります」

ちっちゃなカードに、それだけが書かれている。

「お、白鷺か。つがいの鷺やな」

横から父が口をはさんだ。

「つがいのぞき?」

「ああ。鷺はな、一度結婚すると一生その相手と連れ添うと言われてるんや」

「本当?」

「さあな」

「鷺、田舎で見た」

「へえ、そーカ。番いでか?」

「つづん。一羽だけ」

私は、朝焼けと同じ薔薇色に染まっている白鷺を見て、少し怖くなつた。あの日、砂由さんが私に教えてくれた秘密は「冗談だ」と思つたかった。

けれども、それは嘘でも冗談でもなかつた。冬休みに私はまた、田舎を訪れた。駅に着くと晴れてはいたが雪がドツサリと降つてゐる。祖父が車で迎えてくれていたので、それに乗り込んだ。祖父と、学校や両親の話をしながら砂由さんの小屋の前の道路を通りすぎたときだつた。あるはずのものがない。

「じいちゃん。ここ、前に小屋がなかつた?」「ああ、そこな。一週間くらい前に燃えてしもた」

「どうして

「どうしてって、火事だ」

「それで、どうなったの。その……女人は」「なんか、偶然訪ねてきた知り合いに助けてもらつたみたいだがな。今は病院にいるんじゃないか？」

「その知り合いつて、男の人？」

「そこまでは知らんよ」

「じいちゃん、降ろしてつ。先に帰つておいて」

「火事の後を見ようなんて、趣味が悪いぞ、趣味が。まあ、早く帰つてきなさい」

祖父はそう言つて私を降ろした。車が見えなくなると、私は夢中で小屋に向かつて走り出した。道路から小屋までの距離は結構ある。誰も雪掻きなどやらないから、膝まで雪に埋もれながら進んだ。

小屋は、まつたく奇麗に燃えつきていた。残骸に覆いをするように、雪が降り積もつている。息をらせながら小屋を眺める。頭がガンガンするのは酸欠だからだろうか。

涙をこらえようとして空を見上げた。すると森から、ついと銀の影が一つ飛び出した。

夏の終わりの朝に聞いた、砂由さんの言葉が蘇る。

アレハ、タダノ鳥テハナイノ

アレハ雪ノ化身

命ト引キ換エニ、夢ヲカナエテクレル鳥

「しらわせ」

声に出して咳き、追いかけて走り出そうとして見事に転んだ。鳥は、青い空の小さな白い点になり、一回クルリと旋回して雪に融け、もうどこにいるのか分からなくなってしまった。

砂由さんは、雪の中で、白鷺を捕まえたのだろうか。そうして、願いをかけたのだろうか。

「あつはつは。あははは

心を震わせながら、私は弾けたように笑い出した。わあ、と叫んで駆け出し白い雪の中に埋もれてしまいたい。泣きたい気持ちもう消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0866d/>

白鷺

2011年1月9日02時02分発行